

2017年7月2日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記2章1～12節

説教：イスラエルの王座から人が断たれない

はじめに

ダビデが高齢となり、ほとんど寝たきりの状態になったとき、息子のアドニヤが父親に無断で「自分はきょうからイスラエルの王となるのだ」と宣言しました。これを知った預言者ナタンは、バテ・シェバとともにダビデの所に向かい、いますぐにソロモンを王とするよう誓ったいただきたいとお願いをします。ダビデはこれを受け入れ、王の座をソロモンに譲りました。こうしてアドニヤの起こしたクーデターは失敗に終わり、イスラエルに平和が訪れます。それが前回までのあらすじです。

今日の箇所では、死ぬ日が近いことを悟ったダビデは息子ソロモンに遺言を託します。その中には非常に厳しく聞こえることばも含まれています。いったいどのような意味なのか。考えてまいります。

1 ダビデの遺言

1) 主の約束

ダビデの遺言は大きく分けて二つの部分に分かれていて、前半では、神さまの約束を教えています。そして後半は、ダビデがやり残したことをソロモンに託していく。そういう流れになっています。

3、4節がその前半部分にあたりますが、4節の最初にこうあります。

「そうすれば、主は私たちについて語られた約束を果たしてください。」

いったいいつ約束していたのか。そのことは第二サムエル記7章の11節以降にできま

す。ダビデがエルサレムに移り住んでまだ間もなかった頃のことです。ダビデは神殿を建てるべきではないのかと考え、預言者ナタンに相談をしました。そうすると、神はナタンの口を通してこう語ります。「主はあなたのために一つの家を造る。あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのおとこに起こし、彼の王国を確立させる。彼は私の名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」(第二サムエル記7章11b～13節)

これが、主がダビデに語った約束の内容です。

2) 誠実をもってわたしの前を歩むなら

このことばを、ダビデの遺言と比べてみると、少し違う所があります。ダビデは、「もし、あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、精神を尽くして、誠実をもってわたしの前を歩むなら」と付け加えています。これは申命記6章5節でモーセがイスラエルの民に語ったことばです。イスラエルが大切にしてきたことばですから、ダビデもソロモンに語った。そういうことはあるでしょう。でもなぜダビデがわざわざ遺言の中で繰り返すのか。そのことはまたあとで触れたいと思います。

3) ヨアブ

遺言の後半は5節から9節で、読むと恐ろ

しいことが書かれています。ここには三人の人物が出て来ますが、その最初に上げられているのがヨアブという人です。彼は、イスラエル軍のリーダーとして長くダビデに仕えてきた言わば側近中の側近です。それが自分が死んだら処刑するよう命令しています。アブネルとアマサを虐殺したというのがその理由です。そもそもこのふたり、いったいどんな人たちであったのか。

まずアブネルから。彼はサウル家の先頭に立って軍隊を指揮していた人です。立場から言えばダビデの敵になるのですが、実は彼も信仰者でした。同じ民族どうして殺し合いをしてはいけないと心を痛めていた。ダビデはそのことをよく知っていて、アブネルとならば心が通じ合えると考えていた。ところがヨアブにとっては、自分の弟を殺した憎い相手ということになる。そこでダビデの命令がないのに、怒りにまかせて殺してしまいます。

次にアマサ。彼もやはり一度はダビデの敵となった人物ですが、戦争が終わったとき、イスラエル軍のリーダーとしてダビデが招きます。ダビデがわざわざそうするからには、アマサがどのような信仰者であったのか想像できるでしょう。ところがある一つの事故をきっかけにして、これもダビデの命令なしでヨアブはアマサを殺してしまいます。

ダビデはどうしたか。今なら軍法会議で厳しい処分がなされるでしょう。ダビデもそうしたかった。でもできません。ふたりの間には微妙な力関係があったようなのです。それで何もできないまま今日まで来てしまいました。ダビデは自分にできなかったことをソロモンに託していきます。

4) シムイ

バルジライの子らのことは後で見ることにして、シムイのことを先に触れておきます。彼はサウル一族の者で、ダビデが王になったことをずっと憎んでいました。そのダビデが息子に追われて逃げていくときのことで、彼はわざわざやって来てのろいのことばをダビデに投げつけます。やがて戦争が終わると、またシムイがやって来る。今度は前回と態度は大違い。もみてをしながら「このあいだのことは申し訳ない。あのことは忘れてください」と頭を下げてきました。そこでダビデは、シムイを赦します。けれども、ダビデはシムイの態度やことばを全面的に信じてはいなかったようです。それでシムイには注意するようにと遺言を託します。

5) バルジライの子ら

恐ろしい話が二つ続きましたが、ほっとする話もあります。7節でギルアデ人バルジライの子らには恵みを施しなさいと遺言します。バルジライは、ダビデが息子に追われて荒野に逃れていたときに、親身になって助けてくれた人でした。ダビデはその恩に報いたいののでいっしょにエルサレムに来ませんかと誘うのですが、高齢なので自分には行けませんが、その代わりに息子たちを連れていって欲しいと言うので、ダビデは喜んで息子たちを引き受けることにしました。自分が死んでもソロモンは、彼らといっしょに食事ができるように取りはからいなさい。これがダビデの遺言です。

2 イスラエルの王座から人が漸たれない

1) 罪を犯したダビデ

ダビデが語った遺言は、前半と後半とではばらばらでつながりがないように見えます

が、どうもそうではない。全体が一つにつながっていると考えたほうが良いと思います。糸口は4節です。「もし、あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、精神を尽くして、誠実をもってわたしの前を歩むなら。」

こんなことを言っているダビデですが、彼はどうだったのでしょうか。ご存じのとおりです。バテ・シェバの夫ウリヤを戦場で殺し、人妻を力づくで奪ってしまう。そしてもっと悪いことにそれを隠してしまう。後になってダビデは罪を悔い改めるのですが、この事件のことはダビデの家族に暗い影を落とし、ダビデはこのことですっと苦しみます。

2) それでも世継ぎが与えられる

そんなダビデを神はどのように取り扱ったのか。もうあなたは神の約束を受け取る資格がないと言われたのか。そうではない。誰がダビデの王座に着きましたか。ソロモンが着いた。ということは、ダビデは神の前を誠実に歩んだという評価をいただいたことになる。いったいダビデはいつ神の前を誠実に歩んだのでしょうか。

3) 誠実をもって神の前を歩む

聖書にはあらゆる律法が書かれていて、それを守り行えと言われます。しかし、ダビデは姦淫の罪を犯し、殺人の罪を犯し、隣人の妻を欲しがってはならないという律法を破りました。それでも彼は神の前を誠実に歩んだと言われます。何があったのでしょうか。ダビデはずっと罪を隠していました。しかしあるとき、預言者ナタンに責められ、言い逃れができない場所に追い込まれたとき、告白しました。「私は主に対して罪を犯した。」それでダビデの罪は赦されました。

ダビデのことから教えられます。罪を犯すなどと言われても罪を犯してしまう。それが私たちの現実です。でも神は逃れの道を備えてくださった。罪を犯したならばその罪を神に告白しなさい。それが誠実に歩むことだと言ってください。ダビデはそのことを学びました。それをソロモンに伝えていきます。

では、このことと遺言の後半とはどうつながるのでしょうか。アブネルとマアサは、戦争という時代にあっても、なお神の前を誠実に歩もうとしていました。そのふたりを殺したのがヨアブでした。けれどもヨアブはなんの処罰も受けない。このままでは、神の正義が曲げられたままです。神の前を誠実に歩む者がこのようなひどい扱いを受けてはならない。だからソロモンに処罰を託します。

シムイはどのようなのでしょうか。ダビデのところに来て、一見悔い改めたかのような態度を見せます。しかし神は人の目に見える所ではなく、心をご覧になります。もし悔い改めたのなら、必ずその実を見ることになる。しかし悔い改めていなかったのならそこには悪い実が出て来ます。この後、シムイは神の前を誠実に歩んでいなかったことがわかり、ソロモンは彼を処刑することになります。

3 キリスト

神はそこまで厳しいことをされるのかと恐れるでしょうか。でもよく考えていただきたい。悪いことをしておきながら、神は厳しいと言う方がおかしい。むしろ、罪を犯していても、赦しの道を備えてくださる神であることを喜ぶことができます。

ダビデは言いました。「あなたにはイスラエルの王座から人が漸たれない。」これは預言です。やがてダビデのすえとしてイエス・

キリストが、イスラエルの王座に着かれることを語っています。この方は何をしたのか。私たちが神の前を誠実に歩むことができるようにと赦しの道を備えました。私たちが罪を告白すると、その罪を背負わます。そして十字架でいのちを断たれました。

しかし主はダビデの口を通して何と約束したか。もう一度言います。「あなたにはイスラエルの王座から人が漸たれない。」どんなことがあっても王座から人が漸たれない、と約束された。それは何を意味しますか。イスラエルの王は死んで終わるのではない。死からよみがえる。神はそのような約束をダビデに語りました。

神の前を誠実に歩むことができないと悲しくなることがあるかもしれません。でも主は慰めてくださいます。主は、悲しむ者は幸いだと言ってくださいます。罪を悲しむ者に、この方は断たれることのない永遠のいのちを与えてくださいます。